



Title	<書評>老人病棟（江川晴著，小学館，130円） ; いのちの現場から（江川晴著，小学館，880円）
Author(s)	上平, 京子
Citation	大阪公衆衛生. 1992, 62, p. 25-25
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/83864">https://hdl.handle.net/11094/83864</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



## 書 評



『老人病棟』 (小学館130円)

『いのちの現場から』 (小学館880円)

江川 晴著

最近私は看護に関する本を2冊読んだ。

父の死で落ちこんだことが読みきっかけとなった。遠く親元を離れ生活している私は、もとより親の死に目には会えないだろうと思っていた。そう覚悟をしていた自分自身であったが情けなかった。看護職についていながら何もしてやれなかった事が罪悪のように思われていた矢先、共に仕事をしている訪問指導員さんが1冊の本を差し出してくれた。本の内容はさすがに私の体を一気に突き抜けた。久しぶりに感動し、涙した。

訪問看護婦として日々の家庭訪問の中からケースを通して、自分自身の家族を通して成長した事を書いたものである。行政の中での訪問看護婦の立場や、各方面へ向けてのジレンマなどもつづられていた。この本を読み終えた時、同じ悩みをうち明けあった先輩後輩のような感動を覚え、この著者である江川晴さんに会ってみたいとさえ思った。

もう1冊の“いのちの現場から”という本は、さまざまな現場で働くナースの鮮烈な生きざまを野の花に託して描いているものである。ぜひこの本は若い人達、これから看護を目指していく人達に読んでほしい。

マスメディアでも取り上げられてきているが、なかなか看護婦の地位が向上しないのはどうしてなのだろうか。この本の中に「よい看護をするためには、看護婦自身が豊かで幸福な精神状態であることが必要」という一節があった。まさしくその通りだと思う。私自身、久しぶりに原点を見つめ直すよい機会だったと思う。この2冊を読んだ後の私は心なしか優しくなったような気がする。

(大阪市阿倍野保健所 上平京子)